

第5回 阿波しらさぎ文学賞 徳島文学協会会員が受賞



2022年9月10日授賞式にて

手前左より鎌田航さん、小川真我さん、うっ
かりさん。奥列左より佐々木会長、徳島新聞
編集局長 木下一夫さん

第五回阿波しらさぎ文学賞の
受賞作が発表され、大賞の阿波
しらさぎ文学賞に小川真我さん
の「火取虫」、徳島新聞賞に鎌田
航さんの「眺め」、同じく徳島文
学賞にうっかりさんの「湿り」
が選ばれた。

九月十日に授賞式と文学トー
クが開催された。徳島文学協会
の佐々木義登会長の司会進行で、
受賞者三人と最終選考委員を務
めた芥川賞作家の吉村萬壺さん
と小山田浩子さんが、Zoomを
使って受賞作品について語った。
受賞作品及び最終選考委員に
よる選評は、徳島新聞ホームペ
ージに掲載されている。
<https://www.topics.or.jp/articles/-/758028>

受賞のことば

小川 真我

ずっと無口な子供でした。中学生の
頃が一番酷くて、三年間教室では無言
を貫き通していました。黙っていると
頭の中に言葉が詰まってくるので、空
息しないように発散してやる必要があ
ったのかもしれない。誰かと思っ
疎通するためではない言葉をビリヤー
ドみたいに反響させて、飽きもせずひ
とりで遊んでいました。

私が好きな本の中には、本だけでな
く映画や他の芸術作品の中では、現実
を我が物顔で支配している論理倫理と
は別の法則が生きていて、現実に馴染
めない私はそのことを確かめるために
ニタニタしながら本を読み映画を観ま
す。見たことのない仕方で美しく飛躍
している作品に出会うと激しく興奮し
ます。書くことも今のところはその延
長線上にあつて、受賞作の終盤部を書
いているときには眩暈がするほど楽し
かったです。

賞を頂けたおかげで、作品が人の目
に触れ、様々な角度から感想を頂けた
ことが良い刺激になりました。自分で
何を書いたのか、人伝に聞いて初めて

気付かされるような部分があるという
ことを知りました。

声が小さくてうまく届かなかったこ
とが発言を遠慮させるように、例えば
小学生の頃提出した作文に赤ペンで？
だけ付けて返却されたことを強烈に覚
えていて、理解不能を表す赤い無言の
疑問符が今でも恐ろしく、そのため小
説に書いたイメージを受け取ってもら
えたことが純粹に嬉しかったし、安心
したのでした。

ところで、徳島に引っ越してきてか
ら食欲が異常に亢進していて、何かお
かしいと思えば、もしかするとホーム
シックかもしれません。見送りのとき
に泣いてくれた友達のことを、距離が
離れるだけで大袈裟な鼻で笑ってい
たのですが、ホームシックかもしれま
せん。



2022年9月10日授賞式にて

海で遊んだ日

鎌田 航

ずっと前にここに来たんです。まだ僕たちが、うんと若かった頃に、まだここが、うんと広かった頃に、琥珀の化石を探しに、風にさらわれた子供を追いかけて、なんとなくさみしくて、いつかハネムーンで、君が海を見たいと言ったときに、ここにきたんです。

砂浜をかけていく子供たちが、途中で投げ出した映画と重なって、まだ眠そうな君は持ってきた本を枕にして横になる。海はしずかに発光していて、けれど、まばたきのあいまで元にもどる。「海が近くていいね」そう、海の匂いがする、いい所。港に住みつく人もいるみたいだよ。もう、うまく思い出せないけれど、そんな歌、君がよく歌ってた。まばたきのあいまで、すべて忘れていく。

冬の空を見た、ジョー・マーチ、ヴァージン・スーサイズ、分かり合えないこと、機械の死体兵、遊び疲れた子供たち、自分も他人も見返してやるぜ、なにをしても楽しくない日、疎遠になった友達、女は愛嬌？、ユリイの絨毯、いつかの家族旅行、父親に当たってしまったこと、自殺防止フェン

ス、パヴェーゼ全集、瞼のうすい皮膚の下、夏毛に変わる犬、記憶の濁流、私じゃないといけない理由が欲しい、(where the light gets in)、庭で拾った宝石、叶わなかった夢のゆくえは。忘れていく、すべての、すべての美しいもの。一瞬の沈黙があつて、世界中が君に注目する。――

ずっと前にここに来たんです。まだ僕たちが、うんと若かった頃に、まだここが、うんと広かった頃に、琥珀の化石を探しに、風にさらわれた子供を追いかけて、なんとなくさみしくて、いつかハネムーンで、君が海を見たいと言ったときに、たしかに、ここにきたことがあるんです。



2022年9月10日授賞式にて

たんぽぽと待つ

うっかり

たんぽぽが好きだ。春から仲夏くらいまではたんぽぽを無意識に探してしまふ。見つけるとしやがみ込んで見つめることが良くある。たんぽぽには蜂が来る。蝶も来る。もちろん風も来る。それらをたんぽぽはただ受け入れる。お邪魔でなければわたしも加えてもらい、あたかも生えているかのように佇んでいると、野原と同化した感覚になる。それはとても幸せなことで、うつとりしてしまふ。この同化の体験はわたしの人生の芯といってもいい。できればこの芯により近いものを書きたい。その芯はおそらくわたしにとつての真実だ。他にも同化体験はあるが、そのような奇跡的な体験が今後もあるとは思えない。しかしあの感覚に近いものが書ければ、わたしのいのちとしての役目は終わりではないのではないだろうか。そもそも個々人の芯を書くことは困難なことだ。それができれば明日死んでもいいように思う。逆にいうとそれまでは生きていたい。この感覚をだれかと共有したい。ずいぶん前になるが、朝日新聞の社説で工藤直子さんのあいたくという詩が紹介されていて偶然読んだわたしは衝撃を受けた。その詩の気持ちでわたしは生きて

いる。ぽーっと揺れるように歩き、必要な食事を取り、最低限の仕事をしなから、ずーっと待っている。相手が誰なのかは分からない。わたしが認識できないどこか遠くの読者なのかもしれない。それでもわたしは待つ。おそろくそれがわたしにとって生きるということだ。その過程で今回大変栄誉ある賞を頂けたことはとてもうれしい。いつもご指導してくださる佐々木先生を始め、徳島文学協会の仲間たち、そしてブンゲイファイトクラブの仲間たちにも感謝申し上げます。



2022年9月10日授賞式にて

「と」：古代エジプト文明の知恵の神「トト」に由来する。

「エッセイ」 ヨムヲタノシム

福島健太郎

韋編三度絶つと言う。その様な読書をしている人が、この忙しい現代にどれだけのいるだろうか。

この頃、江戸時代の学者の文章を、あれこれ漫読しているのだが、例えば、儒者の伊藤仁斎は、論語を五十年も読み続けた挙句、論語を「最上至極宇宙第一の書」と呼んだ。これは、長年の熟読玩味によって得た、彼の確信である。大袈裟だと、彼を嗤うだろうか。では、僕たちは「最上至極宇宙第一の書」を持っているだろうか。縦んば、最愛の一冊を持っているとしても、「宇宙第一」と断言するのは、恥じらって躊躇するだろう。

本居宣長の代表作といえ、三十五年もの歳月をかけて完成した大著『古事記伝』であるが、彼は無類の『源氏物語』の愛読者であった。「源氏」を古今無双の書だと、手放しで褒めている。僕は、彼以上に「源氏」を深く愛した人を知らない。仁斎が「論孟」を信じた如く、宣長は『古事記』を信じ、「源氏」を信じた。無数の本が氾濫している今日に於いて、彼らが味わった様な読書経験はなかなか得られるものではない。

僕は暇潰しに「Twitter」を利用して

る。馬鹿馬鹿しいが、読書家のツイートを読むのに時間を浪費している。だが、仁斎、宣長の様に、韋編三度絶つ読書をしている人は見つからない。誰も彼も忙しい。近頃は、知識人が、読書によって得た知識を誇り、読んだ本の数を披露して得意になっている。だが、読書の醍醐味とは何か。頭を肥やすためのもののなか。勿論、各々好きなように読書をすればいいのだが、何だか阿呆らしいのである。

韋編三度絶つ。この言葉は、現代では既に死語なのであろうか。

「エッセイ」 「わかやま」から「和歌山」へ

新海大樹

「わかやま文芸フェスティバル」というイベントを和歌山市で年に一回、毎年8月の第一日曜日に開催するようになり、令和四年度で第4回を迎えた。徳島文学協会が発行している『徳島文学』の一年後輩になる。当初は和歌山の文芸の復興、発展を目的とし、同人誌を販売する企画だったが、年を重ねるごとにプロの方にも参加していただくようになった。

第1回目（令和元年度）はパンフレットを作成し、和歌山にゆかりのある小

説家の中上紀さんと、関西にゆかりのある上田岳弘さんに寄稿していただいた。どちらもこのパンフレットでしか読めない貴重なエッセイである。

第2回目（令和二年度）は、中上紀さんに来和していただき、サイン会を催し、地元のテレビ局のニュースにも取り上げていただいた。

第3回目（令和三年度）には、ホラー作家である田辺青蛙さんを囲んでの怪談会和歌山編と、中上紀さんと某大学の准教授である渡邊英理さんに、オンラインでミニトークをしていただいた。テーマは中上紀さんの著書『タクシーガール』についてであった。

第4回目（令和四年度、8月7日曜日）には、また田辺青蛙さんを囲んでの怪談会和歌山編を開いた。そして、上田岳弘さんと私によるミニトークを行い、テーマは上田岳弘さんの創作秘話を中心に話していただいた。さらに、中上紀さんと『中上健次論』を上梓された渡邊英理さんによるミニトークも行い、御二方の「中上健次作品ベスト3」を発表していただいた。

第5回目になる令和五年度には、心機一転リニューアルすることになり、『和歌山文芸フェスティバル』と少し表記が変わる。「わかやま」から「和歌山」へ。また、特別ゲストを招待しようとして動いているところであるが、どうなるかは未定だ。

現時点で、今年のイベントはオンライン読書会を予定している。課題本が中上健次の初期短篇小説集となり参加費も必要。詳細はHPにて。

「エッセイ」 エア・ライン

谷田七重

このごろ、二十年ぶりくらいに自転車を乗り回している。風を切って走るときは私は有頂天だ。夫からのお下がりのママチャリは前籠がべこりと四んできて、しかも錆びているのだが、今のところまったく不足はない。不足どころか、思いがけず生えてきた翼を嬉々としてあやつっているような気さえる。

三十歳前後のころはよくひとり旅をしていた。羽田空港の喫煙所で缶ビールを片手に一服するときのしずかな高揚、踏みしめるたびやたらと軋む格安航空のボーディング・ブリッジ、長い助走、そして離陸。どこでもない中空へふわりと身体を躍らせたような感覚、名前を脱ぎ捨てて誰でもない誰かになれそうな期待と不安。連綿と続く日常の営みからふいとかくれて、とにかくどこかへ行きたかった。

久しぶりにひとり旅に出たいな、と思ったころにはコロナ禍の真只中だった。仕事はテレワークに切り替わ

り、電車に乗る機会もぐんと減り、めつきり出不精になってしまった。何かが訪れるのをじっと待っていただけなのかもしれない。久しぶりにひとり旅に出たいな、と思う自分自身、そのふわふわとした願望の輪郭をつかめずにいた。

白状すると、徳島文学協会へ入会申込みの電話を掛けたのはほとんど酔った勢いだった。酒の力を借りてエイヤと飛び込んだ、と言ったほうがいいのかもれない。思えば、何かしらの未知へとみずからアクションを起こしたのは、ずいぶん久しぶりのことだった。とにかくどこかへ行きたかった。

協会のめざましい活動は前々から気になっていた。大学を卒業してから細々と文章を書き続けてはきたものの、端から相手にされないかもしれない、という思いは拭えず、作品を提出した上ではじめてのZom小説講座への緊張はすさまじいものだった。

そうして、入会から一年が過ぎた。講座のたびにZomを立ち上げ、徳島へ飛ぶ。このごろでは、画面越しにしか会ったことのない会員の方々が夢に出てくるようにまでなつた。それだけ、遠かったはずの徳島に親しみを抱くようになっていた。

自転車漕いではじめての道を通ったり、はじめての店に入ったりすると、ひとりどこへだって行けそうな気が

してくる。同時に自分が自分である限り、どこへも行けないということもわかっていく。それでもみずからハンドルを握り、ペダルの脚に力をこめて向かう先にはきつと何かが拓けている。助走に過ぎないとわかっていても漕ぎ続ける、書き続ける。

【短歌】

峯菜実子

雨音に混じるフクロウ耳だけで行方を追って落ちてく眠り

猛暑にも嵐の夜にも黙々と飛び続けているステレンスの鳥

一瞬のようで永遠かもしれないぬ眠りのきわの夢幻にあそぶ

【短歌】

血縁

如月玲

再びは訪ふことなけむこの山家従兄の葬儀終へて罷りぬ

結婚を厭ひてをりし姪のメール九州男児を射止めしといふ

情緒不安悩みをりしが二人の孫社会人になる高校に通ふ

【短歌】

青野佑季

埋めれば海の匂いのする鎖骨わたしもいずれ海になりたい

胸元に差し込む光これは治癒 なおれよなおれ、泣きたくなあれ

まぶしさに閉じれば瞼の裏でも光って曳船する恋人

会員の皆さまの活躍

会員の皆さまが受賞された文学賞をご紹介します。文学賞を受賞された方は事務局までご連絡ください。詳細は「と」と六ページをご覧ください。

■十五回銀華文学賞優秀賞

「一本杉」 菊野啓

■第二十回とくしま文学賞

随筆部門 最優秀

「卵を溶く」 赤松祥子

脚本部門 最優秀

「ソラとミドリのにまにまに」

元木理恵

随筆部門 優秀

「ウゴク イノチ」 松尾龍馬

短歌部門 優秀 のやまきのこ

掲載作品募集

会員の皆さまの積極的な応募をお待ちしています。

「ニューズレター」「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

◆エッセイ等 八百字以内

◆詩 四百字以内

◆短歌 三首以内

◆俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限ります。

最新掲載作品

川柳「今、未来」のやまきのこ

作品、募集要項はホームページで

<https://www.t-bungaku.com/plaza.html>



「民雄忌 北條民雄を偲ぶ会」

が開催されました

若くしてハンセン病を発症し、二十三歳で生涯を閉じた徳島を代表する作家、北條民雄を顕彰するため、北條の命日に毎年開催されている「民雄忌 北條民雄を偲ぶ会」(徳島新聞社主催、徳島文学協会共催)が、二〇二二年十二月五日に阿南市夢ホールで行われた。冒頭、富岡東高校演劇部の三名の生徒さんにより、北條の童話「すみれ」が朗読された。山の中でひっそり咲くすみれと老人との心の交流が、抒情性豊かに朗読されると会場は息を飲んで高校生たちの声に聞き入っていた。

続いて徳島文学協会佐々木義登会長より北條民雄の生涯が解説された。ハンセン病の罹患から全生病院への入院、そして川端康成との出会い、「いのちの初夜」の執筆や、芥川賞候補となるものの受賞に至らなかった経緯、そして迎えた死。はじめて北條に接する人でもよく分かる説明だった。

後半では徳島県立文学書道館職員の見盛達也氏が登壇し、佐々木会長との対談形式で北條文学について語り合った。計盛氏は二〇一四年の北條民雄生

誕百年に合わせて開催された「文学特別展 北條民雄——いのちを見つめた作家」を企画展示した中心人物で、北條文学に造詣が深い。計盛氏は「北條が生きるべきか死ぬべきか、そのせめぎあいの中で作品を書いていた」と述べた。佐々木氏は特に「すみれ」など北條が残した童話にも触れ「朗読されることにより、言葉の力が改めて発揮される。生死の問題を扱った北條文学も大事だが、児童文学にも光を当てるべき」と語った。

今回の「民雄忌」は平日開催ということもあり、参加者は五十人と少なかったが例年にも増して内容が濃かったとの声もあった。今後も「民雄忌」が継続して開催されることを宣言して会は閉幕した。



語り合う佐々木氏と計盛氏

四国大学 第一回 瀬戸内寂聴 青春

エッセイコンクール

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第一回瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」は、応募総数七十一作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞の各賞が決定した。

大賞(一作)

「境目」 宗杏樹

国際基督教大学高等学校【東京都】

優秀賞(三作)

「愛すべきポンコツ」 水谷将悠

玉野市立玉野備南高等学校

【岡山県】

「私の青い春」 佐伯日菜子

高知商業高等学校【高知県】

「少子高齢化や過疎化が進んでいる今何ができるか」 本山葵

神戸市立神港橘高等学校

【兵庫県】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

事務局だより

今年もよろしくお願ひします。前回から作品掲載欄が広くなりました。エッセイや短歌の作品をお寄せいただいたみなさん、ありがとうございました。今後も会員のみなさんご応募をお待ちしています。

四国大学 第三回 富士正晴 全国高校生

文学賞

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第三回富士正晴全国高校生文学賞」は、審査対象となった二四四作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞、佳作の各賞が決定した。

大賞(二作)

「筑前煮の魔法」 廣田胡春

筑紫女学園高等学校【福岡県】

優秀賞(三作)

「時速三百キロのタイムマシン」

森和香子

白陵高等学校【兵庫県】

「ドラマツルギー」 湯浅完

滋賀県立彦根東高等学校

【滋賀県】

「うすけむり」 西澤あづき

岩手県立盛岡第三高等学校

【岩手県】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

文学イベント案内

新型コロナウイルスへの感染対策をしながら、一部の文学イベントを会場開催させていただきます。
また提示している講座に関して、非会員の皆様のご参加が可能になりました。
会場と Zoom 開催の両方で受付しております。お申込みの際に、どちらでご参加するかお申し出ください。

【会場開催について】

新型コロナウイルス感染対策として下記の対策をさせていただきます。

- マスクの着用 ●手洗い・手指消毒 ●席の十分な距離の確保 ●室内換気
- 体調が優れない場合はご参加をご遠慮ください。

感染者数増加により、開催を中止させていただく場合があります。

最新情報は徳島文学協会ホームページをご覧ください。

徳島文学協会ホームページ
イベント情報



短編小説講座

参加者から提出された作品と、プロの作品を一作ずつ取り上げて批評会を行います。提出作品が複数ある場合、プロの作品は取り上げない場合があります。

- 開催日 ①4月8日(土) ②7月15日(土)
全回19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場 所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象
作品提出3,000円/参加のみ1,500円
- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定 員 15人程度
- 締 切 開催日の10日前まで(先着順)

※未完成作品の提出はご遠慮ください。

※阿波しらさぎ文学賞に応募予定のある作品の事前提出はご遠慮ください。

小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力のある方やプロの作家を目指す方が対象の講座です。

- 開催日 ①2月18日(土) ②5月20日(土)
全回21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 会員: 作品提出3,000円/参加のみ1,500円
非会員: 参加のみ2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定 員 10人程度
- 締 切 開催日の10日前まで(先着順)

※未完成作品の提出はご遠慮ください。

エッセイ講座

どなたでも文章スキルを身につけることで、素敵な文章が書けるようになります。人を惹きつけるようなエッセイの書き方をお伝えします。

- 開催日 6月17日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講 師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定 員 15人程度
- 締 切 開催日の10日前まで

※非会員の方のご参加について

「小説エキスパート講座」「エッセイ講座」は、非会員の方にもご参加いただけます。
ご参加希望の方は事務局までメールでお申込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

「私のイチオシ本」

お気に入りの小説やマンガなどを持ち寄り、1人1作品、持ち時間5分でプレゼンします。作品の魅力に改めて気づいたり、読書の幅を広げることができます。

- 開催日 3月11日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 参加費 会員のみ対象 500円
- 定 員 15人程度

※プレゼン後の投票で1位に選ばれた方は、ととに書評(1000字程度)をご寄稿いただきます。お礼として500円の図書カードを差し上げます。

■講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。

■Zoomでの参加方法がわからない方に、無料でサポートしています。お気軽にお問い合わせください。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103

TEL : 080-6284-0296 society@t-bungaku.com <https://www.t-bungaku.com/>

【文学賞等に受賞された方はお知らせください】

会員の皆様のご活躍を、「とと」や徳島文学協会のホームページでご紹介します。

小説、俳句、短歌などの文学賞を受賞された方は、事務局までメールでご連絡ください。賞の目安は授賞式に出席する程度です。

ホームページには小説のみ、「とと」には全てのジャンルの受賞実績を掲載予定です。(紙面の都合上、全てを掲載できない可能性があることをご了承ください)